

初年次教育；体験的フィールドワーク授業の構築試論ノート ～「BUKAS」の活動報告・アンケートをもとに考える

榎本達彦*

1. はじめに

昨今の教育的、社会的、経済的その他様々な条件のもとに、少なくない学生が、学ぶ意識が低いままに大学に入学してきている。その事は、大学教育の変容、大学教員の意識の変化、入試制度の再考など様々な問題を高等教育に投げかけている。そして、それ以上に重要なことは、当の入学してくる学生の大学での過ごし方、学び、そして将来をどう考えるかという問題である。

著者は明星大学で2005年から5年間「自立と体験」を担当し、2010年から4年間「自立と体験1」を担当した。その経験を通して、大学生活への適応という意味での「自立と体験」および「自立と体験1」の意義は認められるものの、学びの意識を高めるという意味では、十分とはいえないと考えている。「自立と体験1」に意味がないとかレベルが低いということではなく、「自立と体験1」プラスの初年次教育があってもいいのではないかということである。

一方で、2009年より「BUKAS」という海外で活動するサークルによる、海外フィールドワークを実施している。筆者はこのBUKASの活動を通して、学生が変化していく姿を見てきた。この活動自体は特に学生の意識の変化を目的としたものではないが、結果的に大きな意識の変化を生むきっかけとなっている。

「BUKAS」の活動を通してみられる学生の変化をもとに、一定期間の体験的活動を中心とした、初年次教育プログラム構築できないか、というのが筆者の問題意識である。

このプログラムの構築を進めるにあたって次のような段階を踏むこととなる。最初のステップとして、「BUKAS」の活動を体験した学生たちがどのように活動に参加し、どのように意識が変わったかについて、学生たちの話しを聞き取り、考察を進めることとしたい。つづけて、何故大学生が学ぶ意識を減退させているのかについて明らかにするため、日本における公教育を検証する。最後に、実際にモデルとしての体験的初年次教育プログラムを設計し、実験的に授業を進める中で新たな初年次教育プログラムを構築することとなる。

直観的なプログラムのイメージは、夏休みに何らかの継続的なフィールドワークをする。このフィールドワークは海外で行うとは限らない。ポイントは、①1週間とか2週間とか継続的であること、②設定された体験ではなく、社会的な活動であること、③学生主体で活動すること、④原則的には単独ではなくチームで行うことがある。

そして、夏休み前と後に授業を設定する。そして、夏休み前の授業では基本的にフィールドワークの準備をし、夏休み後の授業では、フィールドワークの振り返りと発表の準備をする。

事前授業でどういうことをするか、フィールドワークの経費は誰が負担するか、どの範囲の活動・フィールドワークにするか、フィールドワーク時の管理はどうするか、終了後の振り返り授業の内容、発表をどうするかなどの詳細を組み込みながら授業を設計するのが筆者の課題である。

今回はその第一段階として、既存の「BUKAS」の活動を考察する中で、最初の授業モデルを構築するのが目的である。

* 人文学部 特任准教授 明星教育センター

2. BUKAS について

このノートにおいては、「BUKAS」の活動に参加した学生へのインタビューおよびアンケート等をもとに、体験的活動をベースにした初年次教育プログラム構築に向かう出発点としたい。については、「BUKAS」とはどのような団体で、どのような活動を行ってきたのかについて、最初に説明することとする。

1) 「BUKAS」設立

「BUKAS」の設立の経緯は下記の通りであるが、「BUKAS」は海外で活動する学生主体の団体である。現在までのところ東南アジアの国々で、子どもと関わる活動が主となっている。「BUKAS」の設立というか、最初の活動は2009年8月のことである。それより5ヶ月前の2009年3月に筆者は、後のフィリピンにおける「BUKAS」のベースキャンプとなる場所、「P&J」を訪れた。そこは、筆者の知人が、当時はフィリピン人孤児のための孤児院を運営していた。2014年1月時点では、その場所は維持されているが、孤児院の運営は休止している。

「P&J」はフィリピンのバターン州バラング市にある。バラング市は、マニラ湾を挟んで首都マニラの反対側、バターン半島の中程に位置する。海沿いではなく、少し内陸に入り、標高が高いのでマニラやバラング市中央と比べると少し涼しい。勿論、バラング市辺りでは、日本人に会うことはまず無い。筆者がこれまで、10回ほど行って、その地で日本人にあったことは一度もない。

「P&J」は当時、孤児院の運営と共に、日本人向けの海外ボランティアスタディツアーを実施していた。実際は、日本のNPO「HoScA」がインターネットで参加者を募り、ツアー内容を企画し運営していた。実は、「BUKAS」の最初のツアーはこのNPO「HoScA」とのタイアップで、明星大学バージョンの企画として実施したのである。

筆者は、最初に「P&J」を訪れたときに、ここに明星大学の学生を連れてきて、フィリピンの子供達と交流したり、様々な史跡や特に戦争の爪痕を見たりしたらいいな、とごく単純に考えたのである。そして、現地で撮った写真を多数持って日本に帰り、何人かの学生にどう思うか聞いてみると、多くの学生が「是非行きたい」との回答が戻ってきた。そんなこともあり、何かのきっかけがあったら、是非実現したいという思いを抱いたのである。

それから、1ヶ月もたたないある日、2年前に筆者が担当していた「自立と体験」を受講していた2人の学生が筆者を訪ねて来た。そして、「海外にボランティアに行きたいのですが、何か情報ないですか」という相談を筆者にしたのであった。筆者はびっくりして、「実はこういう話がある」とフィリピンの「P&J」について話をすると、2人は飛びついてきた。これが、「BUKAS」設立および海外フィールドワークツアー開始の発端であった。

「BUKAS」は伝統的に前年に海外を体験した2年生がリーダーとなって入学してきた1年生とでツアーをする。そして、3年生になるとほとんどが「引退」して、独自の活動をする。独自の活動とは、継続して海外に行く、国内で活動をする、「普通」の学生に戻る等々いろいろである。そして、その後どのようなことをしていても、そのほとんどの学生が「BUKAS」を意識していることは特筆したい。

2. 「BUKAS」の活動

1) 国内での活動

「BUKAS」の活動は、ツアーのリーダーがメンバーを集めるところから始まる。メンバーが集まると、実際に現地では何をするかを学生たちが討議して決める。航空券の予約は旅行会社を通すと高くなるので、インターネットのチケットサイトを探って一番安いチケットを探す。先方との打ち合わせも学生たちの仕事である。

そうして、企画の概要が決まると並行して、現地での活動のための準備に入る。例えば、ゴミ山の子どもたち

を「P&J」に招いて交流をする。そうすると、どんな遊びをするか考え、そのための道具を作ったり、練習をしたり、物品を購入したりする。「BUKAS」は部活やサークルではないので資金は全部自分持ちである。活動費も基本的には一定の金額を参加メンバーから集金する。一方で、学園祭で屋台を出してその売上を活動資金の一部にすることもあ。学生たちは、資金集めのバイトをしながら、ツアーの準備を自主的に進める。

これらの、企画立て、国内での活動は全て学生がおこなう。筆者自身は最初の立ち上げには関わったが、その後はほとんど手出しせず、口を出さずというスタンスである。勿論、大人が必要な場合や質問に対するアドバイスは筆者の出番となる。また、サークルではないが、明星大学の学生が中心で行われるので、大学との関係で筆者が表に出ることもある。

2) 現地での活動

最初はフィリピンがスタートであったが、2年目からはカンボジアが加わり、3年目はベトナムが、5年目からはタイが訪問先に加わっている。行く先とメンバーによって具体的な活動内容は違いがあるが、基本的な現地での活動は下記のようなことが挙げられる。

- ・ 現地の子どもとの交流
- ・ 孤児院や老人ホームでの活動（いわゆるボランティア活動）
- ・ 現地の大学生との交流
- ・ 史跡・遺跡・施設の見学
- ・ 観光
- ・ その他

3) 筆者のスタンス

活動全体を通して、筆者のスタンスは「傍観」である。全くコミットしないわけではないが、国内の活動のほとんどに筆者は参加しない。ただ、リーダーから進捗状況を聞いたりしている。また、現地の活動も参加したり、その場に入るが見ているだけ、参加せず単独行動、といろいろである。大人が必要な場面やかなりの緊急事態以外は学生任せにしている。

筆者としては、学生が主体的に活動することこそが大事だと考えており、場合によっては学生が筆者を排除することがあって構わないと考えている。ただ、今のところは緊急事態と判断した場合（例えば病気や怪我）は口出しするし、アドバイスを求められれば内容を聞いてアドバイスするときもある。

よく人から「学生を連れて行っている・・・」と言われるが、実際は筆者が学生に連れて行ってもらっているのが実際のところである。

アンケート内容 (※注1)

2013年 BUKAS アンケート

学籍番号、氏名、どこに行ったか（フィリピン、カンボジア、ベトナム、タイ、国内組）、連絡先（携帯番号、メールアドレス）

1. 大学に進学した目的

あなたは、大学進学するにあたりどのような目的を持っていましたか。また、大学でどんな事がしたいと思っていましたか。

2. 大学生活を振り返る

これまでの大学生活を振り返って、当初の目標は変わらず持ち続けていますか。もし、それについて変化があったらその事も書いてください。また、大学でしようと思った事はしっかり実行できていますか。大学生活を振り返っての充実度等にも触れて書いてください。

3. BUKAS 参加の理由と目的

今回 BUKAS のツアーに参加した理由は何ですか。また、参加した目的あるいは具体的にどういうことがしたいと思いましたが。

4. 事前の準備段階について

ツアー前の準備活動を通してどんな事を感じ、考えましたか。準備段階を通してどのような変化があなたにあったと思いますか。

5. 準備段階で印象的だった事

準備活動を通して、あなたが印象的だと思った事はどんな事ですか。具体的に書いてください。また、それが印象的だった理由やその事のあなたにとっての意味は何ですか。

6. ツアーで気づいた事、考えた事、学んだ事

ツアーを通して気づいた事、考えた事、学んだ事等自由に書いてください。

7. ツアーで印象的だった事

ツアーを通して、あなたにとって一番印象的だったのは何ですか。その理由、意味についても考えて書いてみてください。

8. 自分の成長

ツアーを通して自分が成長したな、と思った事はどんな事ですか。また、その成長のきっかけは何でしたか。具体的に書いてください。

9. 問題意識

ツアーを通して、社会への関心は深まりましたか。それは、具体的にはどういう問題意識ですか。また、その問題意識を持ったきっかけは何ですか。

10. 今後について

ツアーを終えて、今後の学生生活や生き方について考える事や変化がありましたか。その事についてなるべく具体的に書いてください。

11. BUKAS の活動全体を通して感じた事、考えた事、気づいた事など自由に書いてください。

12. BUKAS という団体の意味はなんだと思いますか。

3. 学生へのインタビューから考える

以下、「BUKAS」の活動に参加した学生へのインタビューやアンケートから、学生の行動、およびその変化、そのきっかけを追いながら、「意識の高まり」ということに関しての考察ノートを記したい。

1) 「BUKAS」参加以前

『わたしはもともと幼稚園の先生になりたいくて、教育に関係する大学に行きたいと思っていました。(中略)先生になるためには大学に行き、その専門分野を学ぶ必要があると思進学しました。

大学では今まで学んでこなかった“教育”について学びたいと思っていたのと、大学生でしか出来ないようなことをしようと思っていました(例えば、アルバイトとか)そして、学生生活悔いのないよう(ママ)、やりたいと思ったことは積極的に行動して、いろんな事を体験したいと思いました。』〈教育学科2年女・カンボジア〉^(※注3)

『「世界がもし百人の村だったら」のTVを見て、世界のことに興味があった。』〈教育学科2年女・カンボジア〉^(※注2)

『大学生になったら、海外に行こうと思ったし、そこで外国子ども達と接してみたいと思っていた。だから、「BUKAS」のことを授業で聞いたときに、これは絶対行こう、と思った。』〈1年女・タイ〉

『かなりひどい成績で、大学に入れるとは思わなかったけど、ラッキーにも受かってしまった。最初は、子どもと接する教員になりたいと、なんとなく思っていたけど、大学に入ってしばらくしたら、教員になりたいという気持ちが無くなり、大学辞めようかなと思っていた。そしたら、クラスの友人が「BUKAS」のチラシを持ってきたの。そして、ミーティングに行って、私も行こうかなと思って、それで他の友達も誘ってたりしたのね。』〈教育学科4年女・フィリピン〉

『大学入試に失敗して、浪人して明星に入った。でも、夏休み前には、再受験してもっといい大学に行こうかなと考えていた。結構腐っていた時期だったですね。そんな時、高校で同級生だった友人が、大学での先輩で、その人が「BUKAS」のミーティングに誘ってくれて、かなり強引に一緒に行かされたんです。』〈教育学科2年男・フィリピン〉

「BUKAS」設立時の中心メンバーが教育学科^(※注3)であったこともあってか現在も教育学科の学生が8割を占めている。従って、入学の時点では「教師になる」という将来像を持った学生がほとんどである。そして、子どもへの関心が高く、海外での活動も子どもに関係することが非常に多い。

ただ、その教師志向の意識は筆者が直接学生から話を聞く限りは非常にあいまいで、子どもが好きだから先生、こんな素晴らしい(あるいはひどい)先生に出会ったから私も先生、というレベルの学生がほとんどである。

もう一つ「BUKAS」メンバーの特徴は大学生になったら海外に行ってみたいという希望を持っているということである。

一方で、大学には入ったけど、何の目標もない、失望して大学に入って来た、入ってみて思った場所と違う、という意識の学生もいる。というよりも、先に書いたような、これをする、これを学ぶために大学に来た、という学生よりも、「何をしたらいいのか」的な学生の方が、明星大学では圧倒的に多い。実は、初年次教育を大学が導入する理由、そしてその対象となる学生は前者よりもむしろ後者であることは言を俟たないであろう。

では、前者のような学生に初年次教育が必要ないかということ、実際は上記のようにその志向はまだあいまいであるし、大学で学ぶということへの意識が必ずしも高いわけではない。「教員になる」ということと「主体的勉強・研究に取り組む」ということが結びつかない場合がむしろ多いようである。

初年次教育のプログラムでは、勿論後者のような学生に対して、学ぶ意欲と将来への意識を高めることがその大きな目的となるが、その時点で持っている意識をより具体的にし、より高めるという役割も同時に持つものである。そうだとすると、授業のなかでもその2方面を視野に入れた上での構成を考える必要がある。

後述するが、「BUKAS」のフィールドワークでは明らかにこの両者の学生に対して、違う影響を及ぼしている。同じ一つの「体験」を経ることで、学生たちはそれぞれに感じまた考え、それぞれの気づきや学びを得ることになる。これは体験教育のもっとも特徴的なことの一つである。

「BUKAS」には独自のスローガンがあるのだが、「体験に失敗はない」というものがある。このスローガンが意味

するのは、誰もが体験を通して学び、変化するということである。

「自立と体験1」^(※註4)を受ける学生のうち、比較的意識の高い学生が、授業に対して「子どもっぽい」、「小学生レベル」というようなコメントをする。このコメントは、「自立と体験1」の教育的効果をコンテンツとして見るところから出てくるものであり、プロセスから学ぶという視点で見ると、「自立と体験1」の授業自体が一つの体験であり、その体験を通しての気づき、学びは必ず存在する。問題は、その体験に向かう学ぶ側の意識である。

そういう意味では、「自立と体験1」の授業を通して、教師の側が学ぶということもある。また、海外フィールドワークも同じで、そのツアーに同行するプロセスで我々の学びもある。

そのあたりの、体験教育の特質は常に意識して、授業設計をする必要があるだろう。

『積極的に行動しなくては何も得ることはできないし、前に進めないとは頭の中で分かっている、自信や勇気がなく行動出来なかった部分はあります。』

しかし、今年夏にカンボジアに行ったことで、知らなかった世界を見ることが出来ました。また、行ったことで勇気が少し持てて、模擬授業など人前に立つことが苦手だったのですが、自分から「やりたい!」と思えるようになり、…後略。』〈教育学科2年・カンボジア〉

「国境を越える」という体験は、思った以上に高い壁であるようだ。マスコミ報道などで、「最近の若者が外国に行かない、内向きだ」という評価をしている。しかし、「BUKAS」に参加する学生を見ていると、最初のきっかけ、最初の一步をどう踏み出すかという問題であるように思う。行く仲間がいる、行く目的がある、そういう後押しもあって、まずは行ってしまふ。一度海外を体験し、現実におつかり、そこに立ってしまうと、国境という壁は一挙に低くなる。

国境の壁は実は自分の作った自分自身の壁であり、国境の壁を越えたという体験が自分の周りにある壁をも低くするのである。それは、積極性であり、主体性であり、好奇心なのである。学びの意識はこれらと結びついている。体験的フィールドワークの効果の一つである。

2) フィールドワークの事前準備期間

『準備活動で印象的だったのは、“フリースクール”という、子どもたちが通う学校のようなところで、自分達が計画した遊びを何にするか考えたことです。遊びと言っても最初はそんなに考えなくてもパッと出来るだろうと感じていました。しかし実際は、2日間あって運動(サッカー、しっぽとり)以外にも何か遊びを考えなくてはいけなく、工作という案がでたものの、内容はどうするか、材料や作りやすさなどいろいろ問題が出てきて、なかなか決めることが出来ず、ただ、遊ぶと言ってもカンボジアの子どもや国のことを考えると簡単にはいかないと感じました。』

そして、ようやく遊ぶ内容も決まり、準備をしていく中で、最初はただ単に材料を集めて、作ってという感じで準備をしていたのですが、だんだん作っていくうちに、この遊びが向こうの子どもに喜んでもらえたらいいな、この遊びで楽しんでくれるかなとカンボジアの子ども達のことを考えながら作るようになっていきました。これは、カンボジアの子には作るのが難しいかな?とか、ここまでやってあげたら向こうの子も作ることができるかな?など向こうの子どものことを考えながら、準備をして行ったので大変というより、楽しんですることが出来ました。』〈教育学科2年女・カンボジア〉

『最初は、なんとなく2年生についていけばいいや、と思っていた。それほど積極的にミーティングや準備に参加していなかった。でも、ミーティングでタイのことを発表したり、いろいろな準備を皆でして行くうちに、だんだん積極的になって来た。今考えると、事前の準備期間にチームワークがドンドン高まった気がする。』〈教育学科1年女・タイ〉

「BUKAS」の活動は常に現場・現地があり、そこに人がいてその人たちとの関係の中で活動をする。つまり、極めて社会的であり、それ故に具体的な様々な条件があり、具体的にそれらの問題を考えなくてはならない。このことが、教室での学びと体験的学びの大きな違いである。

事前の準備段階でのこととして、メンバー間の問題、航空券やホテルの予約の問題、現地との事前の打ち合わせ、保険関係、パスポート、大学との関係などがある。現地での活動を実施するための様々な運営上の問題や調整、現地での安全・保健・衛生問題、地域や現場の人間関係、現地の様々な社会的慣習などの問題などがある。

事前の問題では、ほぼ必ずと言っていいほど起こるのが、メンバー同士での軋轢である。前述のように「BUKAS」の活動は1,2年生中心であるため、2年生がリーダー的になり、1年生は「2年生に連れて行ってもらう」という感覚が強い。したがって、特に当初1年生やリーダーではない2年生の意識は主体的ではなく、活動にも積極的に参加しなかったりすることがある。そういう中でリーダーはストレスを感じ、グループ内のチームワークが乱れたり、リーダーが孤立してしまう、グループ内グループが出来てしまう等々の問題が起こる。

「BUKAS」の活動の経済的基盤はほとんどがメンバー個々の拠出による。したがって、航空券や現地での宿泊等についてはなるべく抑えることが求められる。当初はNPOや旅行会社を通してツアーを行っていたが、最近は学生自らが格安チケットをとり、インターネットなどで格安のホテルを探したりする。例えば、フィリピンなどは、以前は7日から10日のツアーで15万円程かかっていたものが、時期や年によって若干変わるが、8万円ほどで行くようになっている。このようなノウハウがだんだん積み重ねられ、どの時期にどのチケット業者を使うと安いとか、直行便がこの時期は安い、活動の荷物をどう運ぶのが安いかなどの知識が年々に継承され蓄積される。

現地においてはやはりその国の宗教や習慣、環境を考慮しないと、いろいろな問題が起こる。たとえば、フィリピンでは子どもたちを連れてきたら必ず「ミリエンダ」とよばれているがオヤツを出す。また宗教上の問題は特に大事で、事前でも現地でもしっかりと学ぶ。特に現地では教会に行ったり、お寺にいたりしてその国民の宗教への関心の高さを実際に学んだりもする。

宗教的な問題、週間の問題、環境・安全の問題は、場合によっては命に関わるほど重要である。そして、現地の人々と直接かかわることで、日本には考えられないような生活様式や行動様式を学ぶ。世界の多様性の問題もそうだし、実際に習慣や宗教の違う人々と関係を持つことから学ぶことは多い。このことは、フィールドワーク的体験教育での学びの特色である。その体験のプロセスから直接学ぶことも多々あるが、そのことから派生して、社会への関心を高めたり、学ぶ意識を高めることにも通じるのである。

事前準備の段階では、すでに現地を体験したメンバーもいるが、多くのメンバーは未体験であり、上記の学生のコメントにあるように、現地の子どもが本当に一緒に遊んでくれるか、どうしたら喜んでもらえるのかということの本気で考え出す。勿論、実際のところは行ってみなければわからないのだが、事前に様々な思いを巡らし、工夫をする中で想像力を養い、一生懸命の作業に参加し始め、本気でそのことを考え始める。そのようなプロセスで、これも学生のコメントになるように、チームワークやメンバー同士の信頼関係が創られていくのである。ここでも、体験教育の特質が見られる。

3) ツアー中の体験

「正直現地に行く前まで、たった1週間では自分にそんな変化があるわけないと思っていた。(中略) 観光をしている時、人生で初めて「物乞い」をしている子どもに出会った。目が合うと、悲しそうな目をして近づいてきた。そして、黙って手を出してきた。テレビで見た(ママ) 光景だテレビの向こうで見ていた物乞いをして暮らす子どもたちの映像というのは、やはり第三者で、他人で、関係ない出来事だった。でも、目の前で私に向かって悲しい目を向けて手を出してくる男の子を見た時息ができなくなった。世界が止まったみたいに、自分の心臓の音が聞こえた。動

けなかった。テレビの前と違って涙も出なかった。これが現実だ。彼らのためにフィリピンに行くと思っていた自分は、実際はなににもできなかった。」〈教育4年女・フィリピン〉

体験的フィールドワークのもっとも特筆される特色の一つが、上記のコメントにある「これが現実だ」である。学生たちは、日本で生活をしていると当たり前であるがゆえに見えてこない現実を、彼の地で目の当たりにする。その現実を目の当たりにして、最初に来るのがその事への疑問である。「何故」と自分自身にというところから、思考が始まる。

体験的フィールドワークは現実とのぶつかり合いの宝庫である。

「スラム街は都会と違い悪臭がした。そんな場所に暮らす家族に『あなたは幸せですか?』と尋ねると、『ここで家族とご飯を食べて、寝て過ごせるなんて毎日とても幸せです』と即答した。そして『あなたはフィリピンが好きですか?』と聞くと、『愛しています。美しい国だから』とまた笑顔で答えてきた。(中)そして、彼らから『勿論あなたは日本に暮らしているんだから、日本の子と好きでしょ?』と聞かれ、私はなににも答えられなかった。狭くても汚くてもどんな生活をしていようが家族と過ごせて幸せだというフィリピン人を見て、日本のことを考えた。(中略)フィリピンにまで来て、フィリピン人と関わりたいと思っていた自分は、母国の日本のことを全然知らないのだと気づくことができた。」「(前略)かわいそうだと思っていたフィリピン人は、会って話してみるとこんなにも目がキラキラ輝いていて素敵で、どんな環境でも強く生きている人たちだった。会いに来なければこんなことも知らずに過ごすところだった。(中略)たった、この一週間で、自分が日本を知らないこと、物乞いや、今まで見たことのない世界を知ることができ、英語の喋れない自分へのもどかしさを感じた」〈教育4年女・フィリピン〉

この学生は、このフィリピンの後、日本各地を回り、そしてまたアジアのいくつかの国に行くのだが、ある時著者のところに来て「日本の歴史が勉強したい。何か本を紹介してください」と言ってきた。そして、自ら英語の勉強を始め、今では一人で外国に行き何週間も過ごすことができるようになっている。

現実を目の当たりにし、ショックを受け、じっと考え始めたのである。そこから、今何を学ばなくてはならないか、今何をしなくてはならないかに思いを巡らし始めるのである。まさに、体験的フィールドワークをきっかけに、たった一週間の体験をきっかけに、この学生は大きく変わったのである。

「子どもの純粋さがとても印象的でした。カンボジアの子は初めて会った私と目があってだけで微笑んでくれて、近くに寄って来てくれ、手をつなぎに来てくれました。そして、いろんな所に連れて行ってくれ、花を取って渡してくれました。私は日本の子どもだと目が会っても笑ってくれないし、仲良くなるにも時間が必要だが、カンボジアの子どもは違ったので、驚きとともにとても嬉しい気持ちになりました。」〈教育2年女・カンボジア〉

これは、海外フィールドワークで特にその国の子どもと出会った学生の、かなり典型的な反応である。何故、カンボジアの子どもは目がキラキラして、微笑んでいて…ということを考えていないところに大きな問題がある。そして、何故日本の子どもはそうなのかを考察することもしていない。経済的な問題、社会的な問題、実際に日本の子どもがどう思っているか調べているわけではない等々、実際には体験だけで、いろいろ考えだす学生だけではない。むしろ、体験を聴きながら考えるきっかけを与える必要がある。それが、現地でのそして、戻って来てからの振り返りの場面になるのではないか。

ただ、体験のきっかけを与えるだけでなく、それを一つの教育や気づきにつなげる仕掛けが必要である。

4) ツアー以降

「BUKAS」の活動は、夏のツアーが終わると、学園祭での発表ということになる。今の「BUKAS」では、学園祭での発表が振り返りの主要な場面となる。

行き先別にそれぞれのチームのフィールドワークの発表を準備するのだが、ここ2年ほどは全体としてのテーマを決めたり、共同の掲示などをしたりしている。しかし、全体でモザイクアートなどの作品を共同で作成するが、フィールドワークの発表に関しては共通のテーマのようなものがあまりはっきりしていない。そのあたりの議論がきちんとできていないのである。

個々のメンバーの振り返り、チームとしての振り返りもきちんと場を設けて行っていないことも、発表内容に統一性がないことの原因ではないだろうか。

『とても些細なことですが、前は家にずっといたい、友だちから急に誘われても嫌だな、と思っていたのですが、最近は誰かと何にかしたい、一緒にいたいと思うようになり、外にも出かけるようになりました。』

実際には自分のどこが成長したのか本当はわかりません。「成長したことは・・・」と書いたけれど、ほんの些細なこと、これが成長したことなのかわかりません。しかし、カンボジアに行く前と行った後では何か自分が前の自分と違うように感じます。』〈教育学科2年女・カンボジア〉

『今回のツアーはみんなを引っ張っていく立場であったので、自分から投げかける、積極的に動く、計画を立てていく中でとても責任感を持ってこのツアーを終えられたという達成感を得られました。ミーティングでの話し合いを進めていく経験って、私は大学生になってからなかったので、引っ張っていく立場として自分が成長できたと思う。』〈教育学科2年女・カンボジア〉

この記述はツアーを通して自分がどう成長したかという問いに対する回答である。両者に言えることは、自己成長認識があいまいで、表面的であるということである。つまり自分がどう成長したのかということ、自分で認識できていない、それを自分の言葉で表現し切れていない。典型的には「引っ張っていく立場であったから、引っ張っていく立場として、自分が成長できた」という部分にそれが見られる。

学生たちが、現地体験したことを自分の中で対象化し、自分にとっての意味をより明確にするためには、事後の振り返りをする時間をとることが必要であると考えられる。振り返りは一人で言うよりも、教師によるファシリテーションを行ったり、グループで話し合い、共有し合うことでより深い振り返りができる。したがって、体験的フィールドワークにおいては、その事後に時間をかけて体験を振り返り、自分を見つめなおす時間を撮ることが重要である。

『社会というか、世界への関心が深まった。私は、まだカンボジアしか行ったことがないから、もっといろいろな国の教育環境や社会状況を見たいと思うようになった。』

また、カンボジアでの首都と郊外での子どもの様子の差から貧富の差を感じた。これは日本でも言えることではないか、と感じた。』〈教育学科2年女子・カンボジア〉

『歴史はただ学ぶだけの教材だと感じていたが、すべての国は、様々なものを積み重ねて今に至っているということ、自分を自身で感じる事ができた。また、遺跡一つひとつに様々な歴史がありそれを知ることができた時に感動した。遺跡の修復にものすごく魅力を感じました。』

歴史を深く知れば知るほど、感情が入り込み次第に自分がその場にはいない偶然、今の平和な日本にいる自分が不思議になりました。あの悲惨な時代に生きていても、おかしくなかったのに。

歴史を知ること、今が分かり、これから何を目標すべきなのか明確になる。今、様々な問題にであうことが大切

なことを強く感じた。』〈教育学科2年女子・カンボジア〉

カンボジアで感じた「貧富の差」という問題を、日本での問題に普遍化し自らのテーマとして位置付けている。また歴史および歴史を学ぶことの意味に気付き、自ら学び始める、あるいはその延長上に遺跡修復や発掘への関心が生まれてきている。これは、自ら学ぶ意識の芽生えとでもいえるものである。体験的フィールドワークでは、現実を目の当たりにして学ぶこともあり、事前の準備の中で知識として学ぶこともある。しかし、最も大事な学びは、自分自身の中に芽生えた学ぶことへの主体的な意識への気づきである。外的な強制的な学びではなく、自ら学びたい、このために学びたいという意識こそが大学での学びにとって大事なものである。

子どもは本来好奇心を持っていて、知る、学ぶ楽しさを知っていた。しかし、いつの間にかそういう好奇心、知る喜びを失っていく。その原因の一つが、公教育にあるのではないかというのが、筆者の仮説である。この、公教育の件は別に調査をする予定であるが、その前提で考えると、初年次教育の要素の一つは、失われた好奇心の復活ではないだろうか。

初年次教育を新生生に行うことの意義はいくつかあると思うが、この自ら学ぶ意識を持つことはその中でも上位に来るものの一つではないだろうか。このような過程で生まれてきた学びの意識は好奇心であり、好奇心を満足させる学びは楽しみでもある。学ぶことの楽しみ、学ぶことを楽しむという、苦痛ではない学びの復活である。

「BUKAS」の活動は東南アジアの国が中心になっているが、各国の国語を学ぶことはその準備やツアーの最中に挨拶程度の言葉に限られる。しかし、現地で会う人、子どもたちとのコミュニケーションを考えると、そこでは英語の存在が大きい。多くの「BUKAS」メンバーは英語を苦手としているが、ツアーを体験した後に、英語を学び始めるメンバーはすべてとは言わないまでもかなりの数に上る。そこでは、子ども達と話ができなかったという現実的体験があり、そこから自ら学びたいという意識につながるのである。

『何も知らないままだと、何も分からない。何かを知るとそこから広くひろがっていく。ツアーを通して知りたいなというもやもやが次第に固まってきた問題が明確になっていることを、身をもって体験することができた。』〈教育学科2年女・カンボジア〉

『今まで、自分の意思で決めて行動するということがなかったが、フィリピンに行くことは自分で決めた。行ってみて、自分ってなんてちっぽけなんだろうと思った。世界は広い。そして、自分は何も知らないことも知った。そのこと、をもう一度考えたくて、2度目のフィリピンに行った。その時、明星大学の学生達の意識を変えたいと思い、ツアーの企画をやった。』〈教育学科4年女・フィリピン〉

『初めてツアーに参加した時、リーダーだった先輩を見てカッコいいと思った。日本に帰って来て、自分にそのリーダー性がないことに気づき、2年目のツアーではリーダーをやろうと思っていました。事前のミーティングや現地での活動を通して、マネジメントということの面白さと厳しさ、大変さを学びました。

ツアーを通して、自分に向き合うことが多く、いろいろな自分を見た気がします。』む 〈教育学部2年女・タイ〉

ツアーを通して、現実を目の当たりにし、その中で自分自身に向き合いながら、社会について、自分について関心を持ち、深く考えることとなる。特に、ツアーのリーダーという役割はいろいろな意味で問題を与えてくれ、悩み、怒り、最後は居直って、それらの問題に立ち向かうことになる。それは、リーダー以外のメンバーには体験できない、気づき、学びがある。多くのリーダー達は、外からのファシリテーションなしに、自分自身や様々な問題を深めていく。

このことをリーダーということではなく、役割として敷衍することができないだろうか。そうすることによって、参加のメンバー達の多くが同じような位置に立ち、同じような体験をして学ぶことができるのではないだろうか。こ

の役割という要素をどう体験的フィールドワークにはめ込むかは重要な問題であり、考察の必要がある。

4. 全体を振り返って～授業モデルと今後の課題

1) 体験的フィールドワーク授業のモデル

体験的フィールドワーク授業の大枠の流れは、①事前準備授業、②現地での活動、③帰国後の振り返りと発表ということになる。あるいは、とりあえずこのような形で置いて、具体的な肉付けをして行くのがいいだろう。

①事前準備・授業

- ・フィールドワークに関わる事前調査：例えば「BUKAS」の活動に沿っていえば、カンボジアという国についての基本的知識（地理、社会、経済、政治、教育等）
- ・実際にどのようなフィールドワークやイベントをするかを定める
- ・フィールドワークやイベントのための準備
- ・フィールドワークをするための問題点、どのような準備があるか、予め諸ラベルこと等
- ・コスト的な問題：フィールドワークをするにあたって、どのような経費がかかるか
- ・現地との連絡：必要ならば、現地との連絡をとり、情報を得る
- ・交通、宿泊、食事・保険などの手配
- ・資料の作成；フィールドワークのしおりのようなもの、持ち物チェック、場合によってパスポートなどの確認
- ・その他

②現地での活動（7～10日位）

- ・毎日あるいは1日おきくらいにミーティングやセッションを行う（教員によるものと学生だけで行うもの）

③帰国後の振り返りと発表

- ・学生による振り返り
- ・教員による振り返りファシリテーション
- ・体験的フィールドワーク実施発表会への準備

2) 授業イメージ

授業の中心は夏休みに行う体験的フィールドワークになる。体験的フィールドワークとして何をするか。一つは、「BUKAS」的な海外フィールドワークあるいはいわゆる海外ボランティアのようなものが考えられる。もう一つは、国内でのフィールドワークも考えられるであろう。例えば、1～2週間くらいの継続的なボランティアとか、子どもを連れてのキャンプ、サマースクールのようなものも考えられる。

そうすると、この授業は前期後期と夏休みの一定期間というイレギュラーな形になる。回数的には、前期の準備授業が10回位、後期の振り返り発表が5回位、そして夏休みの7～10日となる。そうすると、大学のカリキュラムに合わせると、年間30回の科目となる。

一クラスは、「BUKAS」の海外でのフィールドワークをベースに考えると15名前後が適正であろう。それに、教員1名と場合によってはSAを1～2名となる。

SAについても、一つの授業との位置づけで考えていいのではないか。つまり、1年生の受講者と2年生の受講者がいて、1年生は初年次教育として、2年生はキャリア教育とかリーダーシップの実践的授業という位置づけとなる。

3) 今後の課題

今後この授業を構想していくにあたって、とりあえずは2014年度夏の「BUKAS」のフィールドワークを授業モデルの予行演習的に位置づけ、授業モデルを具体的にして行きながら、授業を行ってみることである。まずは、授業の構想をより具体的に、教材や進行案を作成することとなろう。

注

(※注1) アンケートについて (p.73)

アンケートの質問項目は「BUKAS」に関わる以前(1～3)、事前のミーティングおよび活動(4,5)、現地での活動(6～7)、活動を終えて(9～12)の4区分に設定した。これは、ツアーを中心とした学生の意識や関心の変化についてみたいという意図である。

また、全質問で記述式回答を求めている。これは、選択式の回答では汲み取れない、微妙な情報をことばの端々から汲み取りたいという意図である。また、アンケートの回答を読んだ上で、再度インタビューをしてその詳細を聴きとることも想定していたためである。

回答者の学生には、問われて考えたり思ったりしたことを、自由に記述してほしかったので、アンケートを渡す時点で、質問を読んで、頭に浮かんだことを自由に書くように伝えた。

(※注2) 学年はフィールドワーク時で国名は渡航先

(※注3) 「BUKAS」設立当時は人文学部心理・教育学科教育学専修であったが、明星大学の2010年の改組で教育学部教育学科となっている。

(※注4) 「自立と体験1」については『明星大学明星教育センター研究紀要第1号2011年3月』【実践報告2】「自立と体験1」導入の経過報告(榎本達彦) p.31～36